

2022年4月10日

受難週礼拝

「十字架への道」

マルコによる福音書 11：1～11

佐々木佐余子

今朝の礼拝は棕櫚の主日礼拝として知られております。イエス様がいよいよエルサレムの町に入られ、これから十字架への道に進まれる最初の出来事です。イエスさまは3年の公生涯を終えられましたが、その間、人々を愛し病気を癒され神さまの福音を伝えました。そして、人生の終わりに苦難を受けられたのです。主イエスは初め大歓迎されました。町の人々は大人から子供まで棕櫚の大きな葉のついた枝を持ち喜んで迎えました。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように」と言いながら、葉を絨毯代わりに道に敷いて迎えたのです。イエスさまはその時、うれしかったでしょう。ホサナとは今救い給え、という意味です。救い給え、とは人々の置かれた苦しい現状を表しています。ローマの圧政下にあって生活も大変で税金をたくさん取られユダヤ教の祭司たちは何の頼みにならず、祭司たちに、厳しい律法を押し付けられてあえいでいる日常生活。イエスさま何とかしてくださいと叫んでいるのです。あなただったら出来るでしょう、と期待をかけました。ところがその後、状況が変わってくると人々の心は一変してしまいます。そこらへんが恐ろしいですね。

イエスさまのこれからのご苦難の道行きをあらわしているヴィア・ドロローサの道がエルサレムに現存しています。イエスさまがユダヤ教の最高議会に捕らえられ、ローマ帝国の総督ピラトによって有罪とされ、十字架を背負ってゴルゴタの丘へ向かって歩んだ全長約1キロメートルの道です。ゴルゴタとはされこうべという意味なのですが、別名カルバリとも呼ばれています。丁度人間の頭蓋骨のような形をしている丘なのでそう呼ばれているのです。頭の部分が固い岩石で、草で覆われた草原です。そこに十字架が立てられるのです。囚人は恐怖で慄き、中には暴れる人もいたでしょう。それで感覚を鈍くするため没薬を混ぜた葡萄酒を飲ませたりするということです。ヴィア・ドロローサは、悲しみの道という意味です。その道には9つのステーションがあり、これは留（りゅう）停めると書いて留ですが置かれています。ご存じの方はおられると思いますが、イスラエル旅行では訪ねる方もいるでしょう。ここでは留についてはふれませんが、町の小道に店が所狭しと並び人々が多数行き交っていて壁に打ち付けられている小さな留を見落としがちになります。今の町はオスマン帝国が16世紀に建造したので、キリスト教徒にとっては神聖な道ですが軽んじられている感がありますね。1キロの道を重い十字架を担がされ歩いたのです。3回つまずき倒れたので、そこへアレクサンドロとルフォスの父でシモンというキレネ人が田舎から出てきて立っていたので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせたのです。このキレネ人は「何で私が」と驚いたでしょう。キレネは北アフリカにありギリシャの植民地でした。用事でエルサレムに来ていたのかもしれませんが。この人は人々の後方から見ていたら、何らかかわりがなかったのに、前に出ていたので目についたのではないのでしょうか。でもどうし

てわざわざ前に出たのでしょうか。そこが不思議ですね。実はこの人はディアスポラのユダヤ人だったのではないか、と言われていました。様々な事情で多くのユダヤ人はエルサレムを離れ各地で生活していたのです。このシモンの奥さんはパウロが母のように大変お世話になった人なのです。子供は2人いて兄はアレクサンドロ、弟はルフォスです。そしてお父さんのシモンは後から教会に行くようになったのでしょうか。シモンは主の十字架を担いだことを光栄に思い家族に話したでしょう。家族の喜ぶ顔が目に見えるようです。強いられた恩寵ですね。

自分の家族のことを話してなんですが、夫もシモンに似ています。結婚した当時、教会にはさっぱり興味を示しませんでした。我関せず、どうぞ好きなように、という態度でしたね。けれど夫も人生の荒波に揺さぶられ神を求めるようになったのです。曾野綾子さんや三浦綾子さんの本を読むようになりました。キリスト教の講座にも積極的に出るようになりました。そして受洗に至ったのです。今は伝道の後方支援をしてくれています。でも他の宗教に行かなくて本当に良かったと思っています。シモンのような重い十字架ではないけれど、彼に見合った十字架を神さまは背負わせているようです。それは神の恩寵だと思います。あの頑固な人がよく変えられたと思っているのです。

主イエスは何故反抗もせず、黙々と十字架の道を歩まれたのでしょうか。そのことについて考えてみたいと思います。ナザレのイエスは少年の頃、都に上京した時、神殿を自分の父の家と言われました。それは考えてみれば恐ろしい言葉であり、そして不敬な言葉です。でもそのような12歳の頃からもう彼のメシア意識は芽生えていたのかもしれないと私は推測します。そして母マリアはそのことをすべて心に収めていたのです。

主イエスは神から定められた使命ミッションを受けていたのです。その使命は誰にも話せない使命でした。ですからいつでも弟子たちに口止めをしました。主イエスが逮捕され裁判を受けられた状況や、十字架にかけられ死に至るまでまるで子羊のごとく従順であられたのは預言書であるイザヤ書をなぞらえていたのではないのでしょうか。イザヤ書53章にはこのような御言葉があります。「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた」このみ言葉を主イエスは十字架上で反芻したと推測します。「彼は自らを償いの献げ物とした。彼は子孫が末長く続くのを見る。主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる」とイザヤは預言します。神の望まれることはイエス・キリストの手によって成し遂げられるという意味です。このことを十字架上のイエスは靈感によって悟ったと思います。

十字架上の道行きは厳しく辛いことではあったけど、でもその中でとても美しく慰められる出来事がありました。それはマリアのナルドの香油注ぎです。主イエスがエルサレムに入られてから次々と魔の手が忍び込んだ時、祭司長や律法学者たちはイエスを殺す段取りをしていました。そのような受難の中でほっとするエピソードがベタニアでの香油注ぎです。主イエスもこのような女性に慰められたでしょう。でもこの女性は大変勇気のある女性ですね。並みいる男性たちの前で静々と香油の壺を持ち大胆にもこの壺を壊し主イエスの

頭に注ぎかけたのです。とたんに良いにおいが辺りに立ち込めました。ところが弟子たちはこれを見て憤慨して言ったのです。「なぜ、こんな無駄遣いをするのか。高く売って、貧しい人々に施すことができたのに」しかし、この香油はこの女性が持っていたものであり、男性たちに言われる覚えはないのです。しかも、高く売って貧しい人々に施すことができたのに、と正当化しました。ヨハネによる福音書を読むとこの女性はマリアであり、彼女を非難したのはイスカリオテのユダであると書かれています。「彼がこう言ったのは、貧しい人たちを心にかけていたのではなく、彼は盗人であって金入れを預かっていてその中身をごまかしていた」からなのでした。そのことを主イエスはよくご存じであったのです。すると主イエスは言われました。「するままにさせておきなさい。なぜこの人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ」と弁護しました。女性はほっと安堵したでしょう。この女性は葬りの準備をしていたのです。何という先見性でしょう。この女性はイエスがもうすぐ亡くなると思って悲しくて悲しくて泣いたのです。そしてタオルの代わりに長い髪でイエスの手足に流れている香油を拭ったのです。美しい行為ですね。そういうことをしてもらった男性は今までいたでしょうか。そしてもう 1 つイエスの謙遜の限りを尽くした行い、それは弟子たちの足を洗う行為です。

今月 14 日は洗足木曜日です。「さて、過越際の前のことである。イエスはこの世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛してこの上なく愛し抜かれた」とヨハネによる福音書にあります。ユダを除いて愛し抜かれたのではないのです。ユダも含めて世にいる弟子たちを愛されました。普通、自分を裏切ると知っている人は愛せないでしょう。ヨハネはサタンがユダの中に入ったとしています。ユダがパン切れを受け取るとサタンがユダの中に入ったのです。こういう考え方はいいですね。日本にも「悪を憎んで人を憎まず」ということわざがあります。人間そのものが悪に染まっているのではなく、悔い改めたらサタンは離れるのです。イエスさまはたらいに水を汲み弟子たちの足を洗われ、腰につけた手拭いで拭き始められたのです。その時弟子たちは一体どう感じたでしょうか。前代未聞の行為に違いありません。主イエスがペトロの足を洗おうとすると「私の足など決して洗わないでください」というと「もし洗わなければあなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と言われたのです。そこでシモン・ペトロは「主よ、足だけでなく手も頭も」と言ったのです。そのことはあまり強烈だったので初代教会は記憶に残り後代に伝えたのでしょう。主イエスはそんなにも弟子たちを愛されたのかと思います。しかし主が十字架につけられると皆逃げてしまったのです。そればかりか最初あのように熱狂的に迎えた人々も最後は「十字架につけよ」と叫ぶのでした。このような人間の心変わりが怖いですね。聖書は人間のありのままを示しているのです。

しかしながら、私たちは主イエスが復活されたことを知っています。受難週がそれだけで終わらないことを。そこが救いです。もし復活がなかったらもう虚しいのです。この世に何の望みも夢も希望も無くなるのです。

来週は復活されたイースター礼拝を守ります。うれしいですね。